

# 地域環境資源を活用した体験学習の効果と課題

Effects and Problems on Experience Learning of Agriculture and Environment Using Regional Resources

石田憲治\*、南埜 猛\*\*、田村孝浩\*\*\*

ISHIDA Kenji\*, MINAMINO Takeshi\*\* and TAMURA Takahiro\*\*\*

## 1. 研究の背景とねらい

自然環境の豊かな農村での生活体験や「いのち」を育む農作業体験が子供たちの発達過程で重要な役割を果たすことが指摘され、総合的な学習の時間を利用して多くの小中学校で自然環境体験や農作業体験が実施されている。さらに、2008年度から小学校における農山漁村での長期宿泊体験活動を支援する「子ども農山漁村交流プロジェクト」も開始される。また、自治体が体験活動を積極的に支援する事例も散見されている。

一方、都市農村交流による児童生徒の農業体験受け入れを通じた農村地域の活性化や産業振興との関わりも事例的には検証されつつあり、生きもの観察や環境活動を通して子供たちを巻き込んだ地域資源の保全管理等、共同活動の活発化も期待される。

本研究では、2007年度から本格実施されている「農地・水・環境保全向上活動」（以下、「共同活動」と略称）の取り組み事例をマクロ的に分析するとともに、学校教育と地域活動の連携視点から、地域環境資源を活用した児童生徒の体験学習について、事例地区調査を通して効果と課題を考察する。

## 2. 自然環境体験及び農作業体験学習の事例

### (1) 都市部の中学生による農作業体験学習

2002年から中学生の農家民泊による農作業体験学習の受け入れを開始した宮城県加美町では、合併前の旧町グリーンツーリズム推進会議（会員約50戸）が中学校側と農家を仲介している。基本的には約30戸/校の農家等に分宿して農作業や農家の生活を体験するカリキュラムとなっており、毎年3～5校を受け入れてきた。

農作業のカリキュラムは、耕種から畜産、生産物や加工品の直売所への出荷など多岐に亘り、季節に応じた農家の作業を手助けしながら農業や農家の生活を学ぶ内容となっている。受け入れ農家の約1/3は毎年受け入れており、農業の楽しさや厳しさ、農家の暮らしを都会の子供たちに伝えたいとの考えが、中学生受け入れの主たる動機になっている<sup>1)</sup>。今後の需要増に対応して、家族間での労働分担や受け入れ農家の拡大、部分的な協力を地域として組み合わせる調整機能の強化などが喫緊の課題とされる。

### (2) 都市部の小学生による農村地域での農作業体験学習

兵庫県下の市街地に位置する農作業体験学習の実践校の事例では、児童の通学途中に農地をみる機会はなく、車で1時間以上離れた場所で地元の営農組合が受け入れ先となって実施している。遠隔のため、体験は「田植え」と「稲刈り」に限定され、「米」に関する季節を通じた詳細な内容については、学校での調べ学習を主体に実施されている<sup>2)</sup>。調査対象とした2校のうち、総合的な学習時間30時間を充当したN小学校では、「食」をキー

\*農村工学研究所 National Institute for Rural Engineering \*\*兵庫教育大学 Hyogo University of Teacher Education  
\*\*\*宇都宮大学 Utsunomiya University / キーワード：都市農村交流、体験学習、地域活動

ワードにした学習であるため、題材を米から大豆に変更した時点で体験場所も学校園に変更された。他方、教科単独の学習として実施している J 小学校では、5 年生の社会科の学習内容として継続実施されている。

### (3) 小学生による近隣型の農作業体験学習

体験実施場所が小学校の近隣に位置する事例では、農作業体験内容が豊富であり、体験回数も多く複数の学年が参加していることが多い。宮城県加美町の事例では、休耕地を活用した植生調査を並行してそのデータも児童の関心を高めるなど、総合的な学習を契機とした教科学習への発展がみられた<sup>3)</sup>。兵庫県下の事例においても、収穫後の餅つき大会の実施など農作業体験から派生する活動が校内学習に活用されていることが指摘できる。

### 3. 学校教育と地域活動の連携

児童生徒の自然環境体験や農作業体験学習は、農業者はじめ長年の経験や専門的な知識を有する地域のボランティア等に支えられている。そのため、地域活動との密接な連携が重要である。生きもの観察や環境保全の取り組みなど「共同活動」を実施している全国 17,144 地区における非農業者団体の参加状況をみると、学校・PTA の参加は 28.9 % の地区にとどまるのに対して、子供会は 60.5 % の地区で参加があり、子供たちが参画する地域活動が体験型の環境学習などに重要な役割を果たす可能性が示唆される。

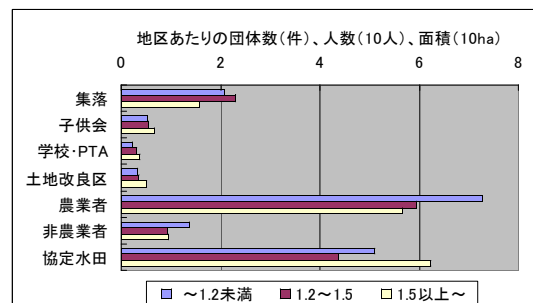
学校教育と地域活動の連携事例を地域主導と学校主導に大別すると、それぞれ表 1 に示す特徴が整理される。教員の異動による継続の困難性や学校のカリキュラムとの調整に時間を要することを懸念して、学校の

地域主導の連携事例	学校主導の連携事例
・資源活用や地域づくりが主眼 ／・資源保全活動の強化／・合意形成の契機／・行政支援事業の推進 ／・希少生物相などの保全 ／・自然環境や伝統文化の保存会等の存在	・総合的な学習の研究指定校 ／・農業体験学習や環境学習の推進 ／・食育の推進 ／・生命の大切さや自然との共生学習 ／・学年を越えた合同学習の契機づくり ／・地域との交流の場づくり

都合を優先しつつ地域主導で取り組む事例も多いが、特定の学年の学習内容として、教育側から積極的取り組みが図られる事例が増加しつつある。これは、一貫性をもった教育効果を重視するもので、2007 年度から試行されている兵庫県の環境体験事業などが注目される。小学 3 年生を対象として、ア.里山、イ.農作業、ウ.漁業、エ.自然観察を体験させる環境学習の支援制度であり、初年度は県下 25 % の学校を対象、3 カ年で全県での実施が計画されている。たつの市の推進校 4 校では、総合的な学習の 20 ～ 40 (平均 27) 時間が充たされ、「自然との触れ合い」を重視した当初の目標が達成された。

### 4. 地域環境資源の保全管理と体験型環境学習

地域における共同活動では、子供会や学校・PTA の参加が環境テーマ数を増加させる傾向が指摘できる (図 1)。また、18 年間に亘り農作業体験学習を実施してきた学校では、校内分掌として稲作担当者が置かれており、労力面での配慮や地域との調整組織の存在が重要であった<sup>2)3)</sup>。



謝辞／兵庫県龍野土地改良事務所、たつの市教育委員会、加美町農林課、農林水産省農地整備課、体験学習関係者のご協力に深謝する。

引用文献／ 1) 田村ほか(2007)、農村計画学会誌、26(論文特集)、383-388。 / 2) 南埜ほか(2008)、兵庫教育大学研究紀、32、43-51。 / 3) 石田ほか(2007)、システム農学、23(別)、54-55。